

平成 30 年 6 月 27 日現在

機関番号：12201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2017

課題番号：26380867

研究課題名（和文）小中学生のネットいじめ加担と被害者に対するシャーデンフロイデの関連性

研究課題名（英文）The relationships between active involvement of cyberbullying among primary and junior high school pupils and the sense of schadenfreude against their victims.

研究代表者

沢田 匡人（Sawada, Masato）

宇都宮大学・教育学部・准教授

研究者番号：40383450

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：今や世界中で、いじめの問題は看過できない状況となっている。本研究は、いじめの被害者に向けられた感情、特にシャーデンフロイデと妬みがいじめ関与（強化を含む）に果たす役割に着目し、シャーデンフロイデ及びそれに纏る感情とネットいじめとの関連性を明らかにすることにあつた。種々の調査を通じて、主にネットいじめ関与とシャーデンフロイデの関係を検討した。また、妬みやすさを測定する尺度や、いじめへの選好を測定するための潜在連合テストを開発した。さらに、文化感情混合モデルを提案し、相互協調性、権力格差、人並み志向などの文化的文脈が、妬みの感情の秘匿などを介して、学校のいじめを見えにくくする過程を想定した。

研究成果の概要（英文）：The problem of bullying is now worldwide and cannot be overlooked. In this study, we focus the role of emotions against the victims of bullying, especially the sense of schadenfreude and envy. Aiming to examine how these emotions affect their involvement in cyberbullying, we developed a scale to measure the levels of envy, and the Implicit Association Test (IAT) to measure the preference for involvement in bullying activities. Furthermore, we developed the Cultural-Emotional entangled process model which reveals the process of reducing the visibility of bullying at school through various cultural contexts including interdependence, power distance, and ordinariness.

研究分野：教育心理学

キーワード：ネットいじめ いじめ加担 シャーデンフロイデ 悪性妬み 良性妬み 潜在的態度 妬み 自尊感情

### 1. 研究開始当初の背景

平成 25 年 9 月に「いじめ対策推進法」が施行され、教育現場はもとより地域や行政と連携したいじめの対応や研究がこれまで以上に求められている。しかも近年になって、従来型はいじめとは異なる形態はいじめ、すなわち電子メールや SNS を用いた所謂「ネットいじめ」(cyberbullying) が世界的な広まりを見せている。ネットいじめについては、いじめ対策推進法でも対策を講じるよう記されているものの、その実態を把握する術や具体的な対応策が十分に確立されているとは言いがたい。

このようないじめは、集団化・(被害者の)無力化こそが問題であり、その早期発見のためにも集団化・無力化のプロセスの解明が待たれる。学校の内外を問わず生じ、アクセスが容易で、匿名性の高い状況下で関与できるネットいじめに注目するならば、加害者もさることながら「観衆」(または強化者)や「傍観者」が集団化・無力化に果たす役割も無視できない。彼らの中には、被害者に同情的な者がいる一方で、いじめの被害に遭っていることをほくそ笑む者が含まれていることも否定できないからである。このような感情はシャードンフロイデ (schadenfreude) と呼ばれ、近年、心理学や認知神経科学における研究対象としても注目されている。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、他者の不幸を見て喜ぶシャードンフロイデに焦点を当てて、シャードンフロイデに関連した感情(妬みなど)を含めて、ネットいじめとの関連性を明らかにすることにあった。小中学生を対象とした大規模な調査を通じて、ネットいじめ加担経験の実態を把握すると同時に、いじめの看過や助長に及ぼす感情の影響を解明することで、いじめの収束を早めるための効果的な介入に寄与する成果提供を目指した。

### 3. 研究の方法

シャードンフロイデの研究は、大学生を対象とした実験や、幼児に仮想場面を呈示する手法が用いられることが多い。本研究では、いじめのメカニズムを詳らかにするに当たり、主たる調査の対象を小中学生が経験するシャードンフロイデに焦点を絞った。また、大規模な調査を通じて、顕在化しにくいネットいじめとシャードンフロイデの関連性を把握しようとする試みを実現するために、できるだけ回答しやすい形式の質問紙および項目となるようにも留意した。さらに、特性としての妬みを測定するために、Lange & Crusius (2015) によって作成された Benign and Malicious envy Scale の日本語版(以下、

日本語版 BeMaS) を用いた調査も実施した。

### 4. 研究成果

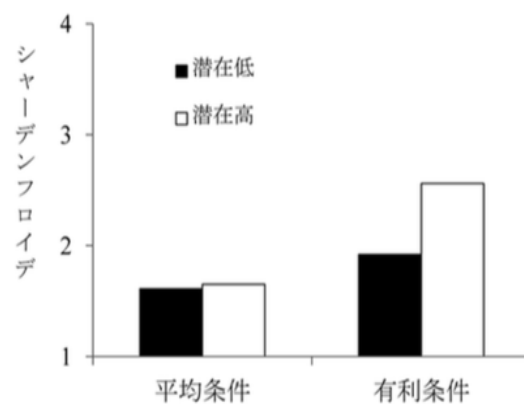
#### (1) ネットいじめ加担の実態把握とシャードンフロイデとの関連

ネットいじめ加担経験の実態を把握するための調査は、栃木県教育委員会のいじめ防止推進事業と連携して行われた。ネットいじめだけではなく従来型はいじめ加担も含め、約 13000 名の小中学生を対象にした短期縦断調査を実施した。その結果、中学生はいじめ加担経験は、学校の特徴(学区内にある小学校の数)や学年によって、数ヶ月間を経た変化のパターンに違いがみられた。

このような調査に加えて、ネットいじめを目撃した場面で生じるシャードンフロイデに関する調査も実施した。ただし、現在進行形はいじめを対象とするのは回答する児童・生徒の負担となることが予想されるため、リアリティを損なわない範囲内で架空の人物が登場する仮想場面を利用した。中学生を対象にして、いじめの被害者に対する妬みがいじめ目撃時のシャードンフロイデに及ぼす影響を検討した研究では、シャードンフロイデは悪性妬みによって促進されることが示唆された。

#### (2) 仮想場面及び潜在連合テストを用いた検討

本研究では、公言しがたい感情を首尾よく測定するためにも、潜在連合テストを援用した研究も行った。大学生を対象として、シャードンフロイデと自尊感情の関連を検討したところ、潜在自尊感情が高い者ほど、妬ましい(有利な状況にある)他者の不幸を喜びやすいことが明らかとなった(図 1)。



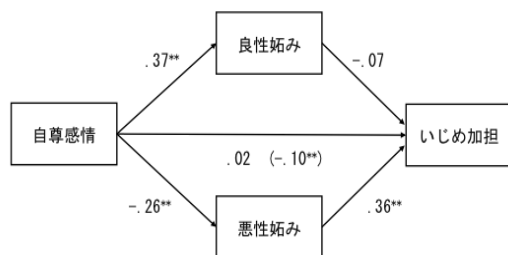
注) 各尺度の合計点の平均値を項目数で除した得点を示す。  
 図 1 潜在的自尊感情の高低と仮想場面に登場した人物の地位の高低におけるシャードンフロイデの平均値(藤井・沢田, 2014)

また、ネットと従来型の両方のいじめ加担経験を予測する指標として、いじめ（加害）仲間の人数やいじめに対する潜在的な選好などに着目した調査も実施した。いじめ仲間の人数がいじめ加担に及ぼす影響を検討した研究では、いじめ仲間の数だけではなく、いじめ仲間が多い学級への所属が、いじめ加担を促進することが明らかになった。また、ネットいじめに関与している仲間が多いほど、いじめに対する潜在的な選好がいじめの強化に繋がることも示唆された。

さらに、いじめに対する潜在的な選好の測定に加えて、親和的な動機によるからかいを継続させる状況（からかいの受け手と周囲の反応）の違い、相互協調的自己観等も合わせて測定することで、これらを考慮した分析を試みた。調査の結果、からかいが最も継続される条件は、周囲の者が笑い、からかいの受け手が笑う場合であることが明らかになった。また、相互協調的自己観がからかい行動を媒介して、いじめ強化を促進する傾向にある点も明らかになった。

### (3) いじめ加担の促進・抑制要因の検討

中学生を対象に、日本語版 BeMaS を用いた調査では、自尊感情が悪性妬みを媒介して、従来型いじめの加担を促進していたが、良性妬みにはそのような効果はみられなかった（図2）。このことから、妬みのサブタイプ理論（双数の妬み、すなわち、良性妬みと悪性妬みを想定するモデル）を用いた研究の有効性が示された。ただし、悪性妬みからいじめ加担への影響関係は、いじめ加害に与する友人の多さを指標とした学級の調整を受けていなかった。



注) 値は標準化係数を示す。  
( ) 中の値は、良性妬みと悪性妬みを統制前の自尊感情の直接効果。  
\*\*  $p < .01$

図2 自尊感情からいじめ加担の良性・悪性妬みの媒介効果（沢田・金網・鈴木，2016）

こうした結果から、悪性妬みが行動化しやすい集団やその背景にある文化的要因についての検討の重要性が浮き彫りになった。そこで日本のいじめを説明するためのモデルを提案した。文化—感情混合モデル（Hitokoto & Sawada, 2016）では、文化的文脈（相互協調性、権力格差、人並み志向）

が、妬み感情の秘匿などを介して、学校の内いじめを見えにくくする過程を想定した（図3）。

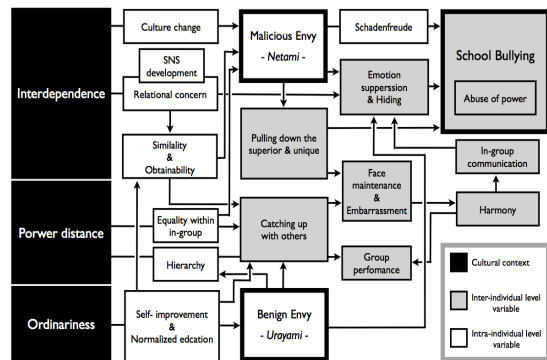


図3 文化—感情混合モデル（Hitokoto & Sawada, 2016）。

### <引用文献>

- ① Lange, J., & Crusius, J. (2015). Dispositional envy revisited: Unraveling the motivational dynamics of benign and malicious envy. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 41, 284-294. DOI: 10.1177/0146167214564959
- ② 藤井 勉、沢田 匡人、自尊感情とシャドウフロイデー潜在連合テストを用いた関連性の検討—感情心理学研究、査読有、21 巻、2014、pp.114-123 DOI:10.4092/jsre.21.114
- ③ 沢田 匡人、金網 知征、鈴木 雅之、悪性妬みはいじめを助長するのか？—妬みのサブタイプ理論に基づく検討—、日本感情心理学会第 24 回大会、2016 年 6 月 19 日、筑波大学（茨城県・つくば市）
- ④ Hitokoto, H., & Sawada, M., Oxford University Press, Chapter12: Envy and school bullying in the Japanese cultural context, In R. H. Smith, U. Merlone, M. K. Duffy (Eds.) *Envy at work and in organizations: Research, theory, and applications*, 2016, 544 (pp. 267-295)

### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

- ① 稲垣 勉、沢田 匡人、顕在的・潜在的自尊感情の不一致と他者軽視の関連—不一致の「大きさ」と「方向」も含めて—、鹿兒島大学教育学部実践教育紀要、査読無、27 巻、2018、221-229

② 沢田 匡人、藤井 勉、妬みやすい人はパフォーマンスが高いのか？—良性妬みに着目して—、心理学研究、査読有、87 巻、2016、pp.198-204  
DOI:10.4992/jjpsy.87.15316

③ 藤井 勉、沢田 匡人、自尊感情とシャードンプロイデー潜在連合テストを用いた関連性の検討—、感情心理学研究、査読有、21 巻、2014、pp.114-123  
DOI:10.4092/jsre.21.114

[学会発表] (計 13 件)

① 嶋田 洋徳、大沼 泰枝、金網 知征、沢田 匡人、松嶋 秀明、杉山 雅彦、神村 栄一、学校現場の今日の問題を教育心理学的視点から考える—認知行動療法の可能性—、日本認知・行動両方学会第 42 回大会、2016 年 10 月 10 日、アスティとくしま(徳島県・徳島市)

② Fujii, T. & Sawada, M. Development and validation of bullying-IAT among Japanese junior high school students, 31st International Congress of Psychology, 2016 年 7 月 27 日, Pacifico Yokohama, Kanagawa (Japan).

③ Hitokoto, H. & Sawada, M. The dark side of class-level self-esteem: Impact of schadenfreude on reported bullying, 31st International Congress of Psychology, 2016 年 7 月 26 日, Pacifico Yokohama, Kanagawa (Japan).

④ Kanetsuna, T. & Sawada, M. Dose envy reinforce bullying?: Interaction with group level influences, 31st International Congress of Psychology, 2016 年 7 月 26 日, Pacifico Yokohama, Kanagawa (Japan).

⑤ Sawada, M. & Kanetsuna, T. The emotion in bullying: Focusing on the roles of envy and its related concepts, 31st International Congress of Psychology, 2016 年 7 月 26 日, Pacifico Yokohama, Kanagawa (Japan).

⑥ 沢田 匡人、金網 知征、鈴木 雅之、悪性妬みはいじめを助長するのか？—妬みのサブタイプ理論に基づく検討—、日本感情心理学会第 24 回大会、2016 年 6 月 19 日、筑波大学(茨城県・つくば市)

⑦ 藤井 勉、沢田 匡人、いじめに対する潜在的専攻の測定の試み—中学生を対象とした IAT を用いて—、日本感情心理学会第 24 回大会、2016 年 6 月 19 日、筑波大学(茨城県・つくば市)

⑧ 沢田 匡人、いじめを取り巻く感情—妬みの働きを中心に—、青山心理学会、2015 年 11 月 14 日、青山大学院大学(東京都・渋谷区)

⑨ Kanetsuna, T. & Sawada, M. Cognitive and behavioural characteristics of junior-high school students in their involvement of cyberbullying, 17th European Conference on Developmental Psychology, 2015 年 9 月 10 日, Braga (Portugal)

⑩ 日本パーソナリティ心理学会経常的研究交流委員会、松下 健、沢田 匡人、大久保 智生、中村 玲子、いじめの心理学—パーソナリティ心理学会はいじめ問題にどうアプローチするか—、日本パーソナリティ心理学会第 24 回大会、2015 年 8 月 21 日、北海道教育大学(北海道・札幌市)

⑪ 渡辺 弥生、沢田 匡人、大久保 智生、山崎 勝之、学校予防教育における感情教育の可能性—いじめや非行の予防に焦点を当てて—、日本心理学会第 78 回大会、2014 年 9 月 12 日、同志社大学(京都府・京都市)

⑫ Sawada, M., Kanetsuna, T., & Toda, Y. How envy of the victim of bullying is associated with the schadenfreude of witnesses, 14th biennial Conference of The European Association for Research on Adolescence, 2014 年 9 月 4 日, Izmir (Turkey)

⑬ Kanetsuna, T., Sawada, M., & Toda, Y. The relationships between risk perception, fear of victimization and coping potential in cyberbullying, 14th biennial Conference of The European Association for Research on Adolescence, 2014 年 9 月 4 日, Izmir (Turkey)

[図書] (計 1 件)

① Hitokoto, H., & Sawada, M., Oxford University Press, Chapter12: Envy and school bullying in the Japanese cultural context, In R. H. Smith, U. Merlone, M. K. Duffy (Eds.) Envy at work and in organizations: Research, theory, and applications, 2016, 544 (pp.267-295)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

沢田 匡人 (SAWADA, Masato)  
宇都宮大学・教育学部・准教授  
研究者番号：40383450

### (2) 研究分担者

金網 知征 (KANETSUNA, Tomoyuki)  
甲子園大学・心理学部・准教授  
研究者番号：50524518

### (3) 連携研究者

一言 英文 (HITOKOTO, Hidefumi)  
福岡大学・人文学部・講師  
研究者番号：80752641

稲垣 (藤井) 勉 (INAGAKI, Tsutomu)  
鹿児島大学・学術研究院法文教育学域教育  
学系・講師  
研究者番号：30584586

### (4) 研究協力者

鈴木 雅之 (SUZUKI, Masayuki)  
横浜国立大学・教育学部・講師